Goshin Moro
Supporters Club News Letter

07

茂呂剛伸後援会 会報

2018/04

JOMON カックウFes

北海道唯一の国宝「カックウ」と共に縄文文化を楽しもう!

2018.3.19
金森ホール(函館市)

3月19日、函館市の金森ホールにて「JOMONカックウFes」が開催されました。同市南茅部から出土した中空土偶(カックウ)は、北海道初にして現在唯一の国宝。そして、世界文化遺産への登録を目指している「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の構成要素の一つであり、そのシンボル的存在です。当日は自らも土偶作品を作る縄文ファンとしても知られる俳優の片桐仁さんをお迎えし、謎に包まれた縄文文化・続縄文文化への想像をふくらませながらのトークと共に、茂呂をはじめとする縄文太鼓隊の演奏を約200名のお客様にお楽しみいただきました。
この様子は4月14日にNHKラジオ第一(道南エリア)で放送されました。

●3ページからのインタビューでもカックウの話題が登場します。

エゾシカの皮が縄文太鼓の革になる
姫路を訪ねて

茂呂が「縄文太鼓」に使用しているエゾシカの革は、兵庫県姫路市の職人・新田眞大さんの手によって作っていただいているものです。「姫路白なめし」は一千年以上の歴史を持つ特産品ですが、新田さんは化学薬品を使わない加工方法を現在唯一行っています。全てを天然の素材で作り上げる「究極のエコレザー」であるエゾシカの革を大切に使いながら、これからも演奏してまいります。

【左上から右下へ】新田さんの工房にて
【右上・右中】姫路の皆さまにも縄文太鼓をお聴きいただきました
【下】白なめしの祖・聖神を祀る高ノ木神社を参拝しました

土器にドキドキ・土偶がGood（グー）・縄文がゾクゾク 続・続

茂呂剛伸

戎谷侑男さん
北の縄文道民会議 事務局次長
(株)シィービーツアーズ 社長

司会・撮影・構成　ウリュウ ユウキ

土器も土偶も「私達を見て!」と現代に現れてきた

戎谷侑男さん　縄文文化そのものに、初めはそれほど興味はなかったんです。14～5年前、ある友人から「北海道遺産のコンテンツで旅行を作っているのは素晴らしいことだけど、これからは縄文の時代が来る」と会う度に言われるものだから、北海道博物館や札幌市埋蔵文化財センターに行って土器や土偶の表情を見て、この時代にこんな芸術的な…と少し気持ちが動いたんですね。その友人に「会おうや」と昼ご飯に誘われてJRタワーの上にある日行ったら、僕だけじゃなくて、当時の副知事とか産官学民の主要な人たちが20人くらい来ている。「今日は確か二人きりで食事じゃ…」と言ったら、みんなそうやって誘われてきた。そこで「北の縄文文化を発信する会」というのを実は立ち上げたいと言われて、あの人に言われたら断れないな、と。そこで事務局をどこにするかとなって、シィービーツアーズは大通の中央バスターミナルの上にあるし、事務局長も誰にやってもらおうか、となったら僕にと。まんまと騙されて(笑)、それが最初の出会いです。
会員を集めているうちに当然僕らも縄文について見たり、考古学の人に縄文とはなんだということをお話しいただくうちに、摩訶不思議とロマンを感じるというか、一筋縄の現実的にはありえないような話もあって、そういうことを確かめている人たちの話を聞くとやっぱり魅力的なコンテンツなんだということがわかってきて、大きく夢が膨らんで、これは面白いなぁと。
平成24年に、もうひとつ「北の縄文道民会議」という会を立ち上げることになったんです。世界遺産の登録を目指すにあたっては、遺産そのものの素晴らしさは当然だけど、それを地元の人たちがどれだけ理解し盛り上がっているかが選定の基準なんですね。ところが道民の中では一部の人たちが盛り上がっている印象が強かったんです。視察にいらした人たちが北海道の人口を聞いて「560万人です」と言うと「地元の人たちはどんな評価、盛り上がり、注目をされているんですか」と色々な質問がどんどん出た時に困っちゃった。そんな時に、民間で応援できるような組織をということで「道民会議」を作ったんです。それで北海道が応援しますということで、また事務局長はどうすると話があって、できるでしょ、と(笑)。とにかく頼まれたら引き受けなければという精神でやっていますから。そして絡んでいくと、音によって、写真で、話をして、漫画にしてとあらゆる手段で縄文文化を伝達する担い手の人が結構いるんですね。そういう人たちと会っていくとなんだか楽しくなってきちゃって、今や縄文文化そのものが私のライフワークになっています。名刺も裏が「道民会議」。どっちが本職かわからない(笑)。
魅力っていうと一口で言えば「ミステリー」ってところかな。縄文そのもの、遺跡を見に行っても土器・土偶を見てもミステリアスなところがあって、自分の判断や感性でこれはこうなんだなということを唱えられる。こんな崇高なレベルの文化に対して、自分の意見をすっと言える。芸術性、これだけのキメの細かい文様を、あの当時何も道具もないのによくやったなぁと、すごいと思います。
僕はそういったことをやりつつ「縄文旅」を作ってからもう5年くらいになるんですけども、道先案内として現地にお連れし見て理解してもらって、口コミでPRしてもらえるかなということを考えて、今や東北から九州・沖縄まで行っているんですよ。この間も沖縄に20人近く行っています。日本全国の縄文文化を「旅」という手段で知って理解してもらう、これはロングセラーとして脈々と続けていきたいと思っています。だから何かあればお客様のアンケートを見て企画して、そうすると行きたがる人って結構いるんですよ。
新しい北海道観光の切り口としてこの縄文文化を広めるべきだし、もっと他のところもこういうものを捉えてやっていく必要があると思うんですよね。遺跡とか土偶とかがある町にいる人たちが「なんでこんなものを見に来たんだろう」と思わせることも大事です。ある教育委員会に行った時に「これ、すごい遺跡ですよ。こんな環状列石が今は草っ原だけど、草刈ってロープ張って大変な文化だとやったらけっこう人来ますよ、この町栄えますよ」と言った。「商売に利用されてもなんだか嫌だよなぁ」というところもあるんです。でもそれは違うんじゃないだろうか、と。縄文遺跡は、土器も土偶も発掘された瞬間に「私たちを見てください!」って、見て欲しくて世に現れて出てきたんじゃないのだろうか、って言うんです。絶対そう。みんなに見てもらって、これはいい、すごい、この文様はなんだ!?…そんな表現をみんなにしてもらうことが、土偶にとっても幸せなんじゃないかと思っています。
道庁の赤レンガで開いた「縄文雪まつり」で、解説のシートを日英中韓の4言語で作って。そこに雪まつりで世界各国の人々

えびすたに・ゆきお …北海道中央バスグループの旅行会社の社長として縄文文化・遺跡を巡る旅行商品を開発。北海道・北東北の縄文遺跡群の世界文化遺産登録を目指し多方面で活躍する。

がいらしたのだけど、それは赤レンガを見に来た時にたまたまそういうのをやっていたわけです。そこにインターンで来ている中国と台湾の留学生を連れて行ったら彼らが通訳をして、そこにうわーっと中国の人たちが寄ってきて周りを囲んで。あんな様子は初めて見ました。どう語り部が説明するかによって、縄文文化の価値が高まる。それは人の力です。観光のコンテンツの中にボーンと置いたら、それは最も崇高な素晴らしい素材になると私は思いますね。

世界遺産登録のその先を今から考えなければ

茂呂剛伸　戎谷さんのお話に共感するところが本当にたくさんあります。縄文は縁を結ぶ"言葉"の一つだと思っていて、それは現世だけでなく、未来を含めて一緒に歩いていけるご縁ではないかと思っています。昨年のフランス公演が実現したのは戎谷さんのおかげです。パリの日本文化会館はご免くださいと言っても演奏できるところではなくて。実はということで戎谷さんに相談したところ、茂呂君の活動が北海道から縄文を発信するということなのであれば道民会議として考えてみようとおっしゃっていただいて実現しました。私は北海道文化に奥行きを与えるものが縄文だと思っていて、それは日本全体にも奥行きを与え、「もっと知りたい」と言葉の文化の壁を超えて思ってもらえるんじゃないかと。道外・海外からお越しになった時に、私たちが道民、日本人として縄文のことを話せるかどうかということ、ここなんですよね。きっかけがあれば面白いと思ってもらえるでしょうし、"聖地巡礼"じゃないですけど、縄文遺跡を回るとやっぱり感じるところがあって、想像が膨らんでいくんですよね。だから縄文旅にはものすごい価値があると私は思っています。

戎谷　縄文旅の中で、行き先が決まればその先に茂呂さんに行って待っていてもらって、私たちが到着したら太鼓で歓迎するとか、そんなことが取り組めたら面白いなぁと思います。縄文太鼓は音や演出によって本物以上の価値を皆さんが体験できる文化ですよね。

茂呂　世界遺産にかける苦悩や課題に、戎谷さんは向かい合ってきています。今の北海道の縄文というものの村長さんが戎谷さんだと思っていて、そこにはハブ的につなげる人、何か推し進めようとする時に方向を示して下さる人が必要なんですよね。

戎谷　2009年に世界遺産の暫定リストに載り、推薦では5回連続延期になりました。登録までの間は、4道県の関係者が文化庁などに行って折衝することに本当に苦労しています。これがもし今年登録推薦されると決まったら、来年に調査が入り、2020年正式登録となると、東京五輪、白老の国立アイヌ民族博物館の開館、縄文の世界遺産登録と、3つのハッピーなものが重なる、そうなれば…と特別な思いが湧き上がります。

登録後は何十万人もの人々が"JOMON"を求めて来ると思うんですが、その時に今の管理体制のままでいいのかということを提言しています。管理が行き届かないと人が入って荒らされちゃう。今から管理をできるようにしないと間に合わないと伝えて欲しいのです。教育委員会の人たちは、管理監督に関しては力を入れるけど、"見える化・見せる化"に関してはどちらかというと消極的なんです。ここをもう少し重要性を訴えなければいけないと思います。

茂呂　民間の力、表現者の力の見せ所ですよね。その実践として"参加型"の縄文文化をどう広げていくか、それには、縄文人の体験に自分を重ねないと、時代の記憶を体感しにくいのではないかと思っています。私は世界遺産候補の遺跡と関連遺跡、全19遺跡を回って、学芸員の許可を得て発掘時の残土を譲っていただき、その土で太鼓を作り、縄文人達の記憶を現代によみがえらせる。この太鼓を全19遺跡に配って歩こうと思っています。現在は各遺跡の管轄や地域の意識もバラバラで、資料館等の施設があるところも、何もないところもあるのですが、せめて私は19遺跡に一つの縄文の音を、土と混ぜて演奏する、そこから自分たちの遺跡の紋様、自分たちの地域の動物の皮で太鼓を作る、風土で縄文を楽しむことが始まっていけばいいなと思います。

戎谷さんは「これから縄文が始まる」とおっしゃっていました。新しい"続・続縄文時代"が始まるんですよね。

戎谷　「土器にドキドキ・土偶がGood(グー)・縄文がゾクゾク(続・続)」。

茂呂さんにこれからぜひやって欲しいのは、幼稚園～小学生などの子ども達に太鼓を叩いてリズムを教えるということ。音が鳴る中にリズム感を養う。そして、縄文太鼓が日本の打楽器の主流になっていって欲しいと思います。手で叩く珍しい太鼓として、人間の皮膚と動物の皮が密着することで響きあうことに他との違いがあるわけですから。

茂呂　すでにその実践として、島牧村教育委員会の協力で、中学校全員が卒業時に縄文太鼓を作っています。100人の卒業生が太鼓を持って、演奏会もやっています。昨年からは札幌芸術の森が同様のプログラムを組んでくれています。

戎谷　茂呂さんのお仲間には若い人がとても多いけど、もっと加わってもらいたい。人って誰しも太鼓を叩きたくなると思う。子ども達が大人になった時にそうして縄文太鼓を広めていって欲しいと思います。今私達のところには約600人の会員がいますが、これを1000、2000名と増やし、担い手を増やしていきたいです。

新しい観光のスタイルでみんなの心を豊かに

戎谷　異業種の方々から話をして欲しいと言われて行くと、自分なりのロマンを話すんです。縄文の"縄"はどこから来たんだろう、とか。それは幾つかの説があって、自分でも本当に分からない。大学の先生も色々な説を持っているけど、僕は誰がマルで誰がバツということではなく、どれもマルだと思っています。主義主張は違っても、スタートとゴール、縄文文化にかける思いは結局は皆同じです。

茂呂　私は中空土偶(カックウ)の存在も大きいと思っています。函館の南茅部にある、北海道で現在唯一の国宝であるそれは、北海道自体の文化を象徴するものだと思います。そのことをもっと発信して欲しい。

戎谷　全く同感です。函館駅、港、空港にレプリカを置いて「1万年前からあなたを待っていました」と多言語で書く、これだけで街の価値は大きく上がる。北海道で唯一ある国宝をどうして活用しないのかと。新潟の糸魚川に行くと火焔型土器のレプリカが街にどーんとある。これを東京五輪の聖火台にできないかという声もあります。火が灯った時に世界中の注目を浴びる。そこでこれは1万年続いた縄文文化の象徴なんですと世界に発信できる。だから、函館の街に中空土偶のレプリカをぜひとも置いて欲しい。

茂呂　レプリカが札幌、道庁の赤レンガの中にもあります。そこに「縄文カフェ」「カックウカフェ」があってもいい。

戎谷　中心にカックウがあって、周りに土

偶などのレプリカがある。そして説明する人がいたり、簡単な土器をその場で作れるようにしたり。夜は縄文太鼓の演奏が聴けたりもする。グラスも縄文のデザインで。土器を形にしたお酒ができたりしたら面白いですよね。

茂呂　縄文時代にも、人が集まれば各地の美味しいものの話とかが出てきたと思います。そこにもてなしがあって、そこから土器や土偶が広がって文化圏が広まっていく。東北と北海道はそうして繋がっていったのだと思います。

戎谷　もっと情熱を持って縄文文化に取り組んでもらいたいし、世界遺産に登録された時に慌てないために、今から備えをしっかりしておきましょうと。そうしたら、世界から何十万人、何百万人来たって大丈夫です。全部が連携出来るように。

茂呂　その実現のために、私は民間の"北海道縄文文化財団"があればいいと思っています。今年の世界遺産会議の頃を目標に。

戎谷　道議会や国会議員の応援団もできました。また道内各地でも「縄文の会」などの組織があります。そうした人たちを呼び集めて「縄文サミット」を開きたい。団結、横の連携で地域に渦のように活動を広げたい。

茂呂　"見える化・見せる化"というお話がありましたが、VR(仮想現実)を使ったようなものがあってもいいですよね。遺跡などでゴーグルをかけると縄文の暮らしや情報が見えて、外すとここにそういう生活があったのかということが想像出来るんじゃないでしょうか。縄文文化というと堅苦しいもの、古いものと思われがちですが、今や縄文は「カルチャー」になっています。

戎谷　この夏に第3次が決まる「北海道遺産」とともに、北海道に根ざしたあらゆる文化が新しい観光のスタイルとして生きてくると思うし、旅行会社としての立場、旅という手段を見失わずに伝えていければと、僕はそれを永遠のテーマ、ライフワークだと思っています。縄文に出会えて、僕は良かったと思っています。

縄文にまつわる人に出会うと、いろいろな人とのつながりが異常に早く広がります。

茂呂　きっとご先祖様が申し合わせして「会え」と言ってくれているのかもしれませんね。素敵ですね。まさに人と出会うということは自分と出会うことなんですよね。

戎谷　今年の私の一年の一文字は「繋」だと、社員に今年は一年これでいこうとやっているんだけど、まさに縄文文化はそうだと思うね。

茂呂　カックウの複製を作っている陶芸家の安部郁乃さんのお話では「3日間、それ以外のことを何にもできなくなって没頭して初めてできる」そうです。数千年前に3日間没頭してこれを作る環境ってすごいことだと思いますし、寿命も今より短かったので、若いうち、早熟の時代にこれを作ったわけですよね。相当大切なものだったと思いますよとおっしゃっていて、それを聞くとなおのこと、どんな環境があったのか、どんな思いだったのか、どう扱っていたのか…に思いを馳せるのは豊かなことだなぁと思います。

戎谷　それが国宝なんだよ。本物に会うとなんか違う。これが畑の中から出てきた時に、お母さんは「なんだ、この人形みたいなの」って思って納屋に保管しておいて。で、子どもが教科書にこんなの載ってたよ、なんか似てるよねって。役場に持ってったら4千年前のものだった。中を見たくてCTスキャンを取ろうと病院に行ったら「これは人間が入る機械ですからダメです」と。それで道庁の縄文世界遺産推進室の阿部千春さん達が住民票をもらってきた。住所は函館市南茅部、姓は中空土偶で名はカックウ、当年4千何歳。市役所も粋な人でね。それを見せて「この人は函館市民です！」(笑)。そうしたら先生も「これは間違いなく函館の人ですからいいでしょう」とCTにかけて。笑い話ではなく本当の話。

縄文文化って、心を豊かにできる逸材ですよ。だって、僕と茂呂さんとあなたの三人でいろいろな夢を話せるじゃないですか。昔お酒ってあったのかなと。山ブドウみたいなのを拾ってきて投げておいたら発酵して、舐めてみたら「うまい」。そんな話から始まるわけですよ。本当かいそれ、ってところから。これがいいと思うんですよね。

旅って夢があるし、ワクワク感があるじゃないですか。どんな旅になるかって。そして行って見た先に縄文文化と出会ったら、それは素晴らしいと。5人5様、その人の感じ方って自由だと思うから、どう感じようといいんですよ。

茂呂　縄文は自分の中で勝手にストーリーを解釈できるので、また行きたいとか、そういう風にリピーターになっていく魅力に繋がっていけばいいなと思います。

戎谷　僕は茂呂さんの太鼓を見て、初めて聞いたときに衝撃を受けたんです。縄文人ってこんな繊細な響きをやってたのかなって、まず思った。確かに音の文化は永久にあって、例えば木をたたいた音で伝えるとか、石と石をカチカチやったりとかね。色々な方法で音を伝えるというのがあるし、でもああいう音楽とリズム感で、とにかく音によって、耳で伝えていくという文化、それは衝撃的でしたね。そして、手でしょ。あれだけ叩いて手が痛くないのかなって。演出もすごく上手になってきて、音で楽しませつつ目でも楽しませる効果があって。いい作品をどんどん作ってくれていますので、いつも楽しく聞いています。

茂呂　今度戎谷さんも自分で作った縄文太鼓を演奏するんです。北海道命名150周年のお祝いに、今まで作った人達と縄文太鼓大合奏を夏頃にやろうと思っています。"縄文時代から北海道が始まる"ということを表現して欲しいという依頼なので、ぜひその際には。

戎谷　いやいや…私が叩くことで上手な人たちが困る(笑)。でも楽しいですよね、縄文の話になると止まないから。飲み屋に行って飲んでいると眠くなっちゃって、でも誰かが縄文の話聞きたいなぁってわざと言うと「社長急に元気になったねぇ」(笑)。不思議とそうなっちゃう。

茂呂　これからも戎谷さんと一緒に、同じ縄文の未来を、素敵な「続・続縄文時代」を見ていきたいですね。

戎谷　縄文の話を始めたら、一昼夜じゃきかないからね(笑)。

(2018/3/13 シィービーツアーズ本社にて)

ここにも、そこにも縄文の響き

茂呂と門下メンバーは、全道を駆け回り、時に道外に飛び出して、それぞれの土地の皆さんとともに太鼓を作り、叩き、楽しみながら、はるか縄文の時代に想いを馳せ、今を表現しながら未来を向いて活動しています。昨年暮れから今年にかけての活動から、いくつかご紹介いたします。お近くでイベントなどがありましたら、ぜひ足をお運びください。

Contemporary Djembe Festival 2017

コンテンポラリー・ジャンベ・フェスティバル 2017
2017.12.9 札幌市教育文化会館（札幌市中央区）

本誌Vol.6でもご紹介した「CDF」。2012年から開催されている、ジャンベの一層の普及を目的としたコンクールとスペシャルライブのイベントです。
「第5回コンテンポラリージャンベコンクール」ではソロ・ユニットの2部門で情熱あふれる演奏が繰り広げられ、日頃磨いた腕を披露しました。スペシャルライブは徳田健一郎さんと茂呂剛伸によるセッションをお楽しみいただきました。
響きあうことで広がる縁を体感しながら皆さんにお楽しみいただくことができました。これからも皆さんのご参加をお待ちしております。

木村功プロデュース
渡辺淳一文学館 ドラマティックライヴ　音と言葉のロンド 第8章

駱駝（らくだ）の瘤（こぶ）にまたがって

2017.10.8 渡辺淳一文学館（札幌市中央区）

2010年から続演している、俳優・木村功さんと茂呂、そしてゲストをお迎えしての「三人のおとこ旅」。古今東西の音楽、そして「うた」を題材に語り、弾き、叩き、歌う舞台です。
今回は馬頭琴・喉歌奏者の嵯峨治彦さんをお迎えしました。そこに木村さんのモダンダンスと茂呂の縄文太鼓が響き合い、小さなステージならではの濃密感とともに時と場所を越えた悠久の景色と音色を展開しました。
本誌発行の日に開催する後援会総会でも、この「駱駝の瘤にまたがって」を参加された皆さまにお楽しみいただきます。

島牧村の縄文太鼓奏者たち

島牧村立島牧中学校 縄文太鼓製作・演奏指導

積丹半島の南西にある島牧村。村唯一の中学校である島牧中学校に毎年お伺いし、縄文太鼓の製作と演奏の指導を行っています。卒業時に手渡された太鼓はすでに100個以上。つまり100人を越す縄文太鼓のプレイヤーが島牧村にはいます。故郷とのつながりを音とリズムで感じられる活動を続けてまいります。

姉妹都市の節目を寿ぐ

札幌・ミュンヘン姉妹都市提携45周年記念祝賀会

1972年の夏季・冬季オリンピックをそれぞれ開催した縁で姉妹都市となってから45年、その節目をお祝いする祝賀会で演奏させていただきました。昨年のパリ公演など、縄文太鼓は国際交流の場でも人と文化をつなぎ始めています。これからもさまざまな場と形で、文化交流のお役に立っていければと考えています。

みんなで叩くおもしろさ

"Jomon-Taiko" Players Voice

Part 3

2017年より、3号に亘って茂呂の門下メンバーの声をお届けしてまいりました。出会いのきっかけや多彩な活動を「みんなで叩くおもしろさ」という切り口で、そして自身の活動や生活とジャンベのつながりやこれからやりたいことを「ジャンベ・縄文太鼓＋〇〇」として語っていただきます。

師範

澤口 勝

川村 怜子

石橋 俊一

太鼓を始めたきっかけはなんでしたか？

2010年、芸術の森「SAPPORO CITY JAZZ」にて、渡辺貞夫氏のバックパーカッションとして現在もご活躍されています西アフリカ・セネガル出身のンジャセ・ニャン氏が奏でていたジャンベの音、表現力に魅了されこの楽器を知りました。
それから、半年を経て道新文化センター講師として現在の私の師匠、茂呂剛伸先生との出逢いからジャンベ教室第1期生として受講したのがきっかけです。

昔からジャンベという楽器は知っており、大好きな音色だったので自分でも演奏してみたいとは思っていたものの、どこでどうやって習えばいいのか分からず、気がつけば数年経っておりました。歳を取るごとに新しい趣味を始めるのも億劫になりダメね～なんて友人と話していたところ、茂呂先生のジャンベ教室を知っており一緒に行ってみよう!と扉を叩いたのがきっかけです。まさか足を踏み入れるとこんなに素晴らしい世界が待っていたとは!!

はじめは、とあるイベントにDJEMP(ジャンピ)で出演されていた茂呂先生とご一緒させていただいたことです。力強い演奏がとても気になりました。同時期にたまたま狸小路のお店でジャンベを安売りしていたので、衝動買いして部屋に飾っていました。
それから2年後くらいに、近所にジャンベのアトリエができたので調べてみると茂呂先生で、これはやるしかないなと悟ったのがきっかけでした。

太鼓の魅力とは？

太鼓に触れるだけで音が鳴り、楽器の難しさという先入観を感じさせない事。
また、自分の表現方法により未知の音を生むこと事が出来るのも魅力かと思います。

叩けば音が出る！国籍、年齢問わずすぐ演奏が出来る、笑顔になれる楽器です♪
知るほど、演奏するほど奥が深く、色んな表情を見せてくれます。もっと知りたい、心を通わせたいと思う楽器です。演奏していると笑顔になったり、想いを馳せたり、涙を流したりお客様自身が音色と対話しているのが分かりますし、受け取り方も一人一人違います。お客様と心のやりとりが出来るのも魅力ですね。演奏者によって魅せる表現の世界は無限大です！

空気の揺れを体で感じられるところです。その空間全体を容易に支配してしまうような、特別な存在感がある楽器ですね。スラップの音の気持ちよさも打楽器の中では群を抜いていると思います。
超絶テクニックの早打ちもいいですが、スローテンポでもしっかり音が出ているとそれだけでかっこいいし、それを大勢でやったりすると、ゆらゆらと太古の時間に遡ってゆくような気分に浸ることができます。

ジャンベ・縄文太鼓＋〇〇
あなたにとっての太鼓の活動、その現在と未来

それは、太鼓+フィットネスです。太鼓を通じて皆様に喜んで頂き、楽しんもらう事に加え数年のフィットネスの経験を生かし、皆様の健康にも寄与したいという想いがあります。
身体的・精神的にも太鼓の活動は、実りあるものであり、社会貢献にとってもプラスになると信じ、日々活動させて頂いております。

「想い」です。私は障害と共に人生を生きてきました。その中で人との出会い、関わってきた人達の優しさ、想いをとても身近に感じ、今まで救われ、生かされてきました。太鼓演奏家として、人と人を繋ぐ、感謝の「想い」を紡いでいく活動をしていきたいと思っています。人の光でもあり、闇でもあり、強さや弱さ、私の発信するものから人が繋がり、心の想いが広がっていく、人々が自分自身を輝かせる事ができるそんな活動を続けていきたいです。

私は演劇、特にコメディが好きで、役者として舞台に立つこともあるので、今は太鼓とコメディの融合を実験的に取り組んでいます。相方の山本師範代と笑いながら練習しています。また、太鼓をきっかけに現代アートを意識するようにもなり、寺山修司の芝居の中で生演奏を担当させていただいたり、現代詩の朗読と太鼓とでライブに出たりしています。自分の表現範囲が広がったり、人との交流が増えたりしていることを今とても楽しんでいます。

茂呂先生ってどんな人？

未来を見据え人生の楽しさ、厳しさを愛を持って示して下さる方です。経済の動きに敏感であり、流れを把握し、人を読む洞察力を伴い、ご一緒している方の想いなどを先に察知し、行いやすいように導くという事を行動によって示されます。とても、感謝と共に尊敬しております。

たくさんの仲間と出会い、見たことのない景色、感じることのなかった想いを経験させていただき、一人では見つける事ができなかった新たな可能性を開いていただきました。日々新しい刺激、独創的でクリエィティブな背中を見せてくださる、私の人生を豊かにしていただいた方です。

色々なものを兼ね備え、アートを追求する一方でエンタメ性も忘れない。ことあるごとに我々に演奏機会を与えてくださったり、聴きに来た方にも楽器に触れてもらうなど、表現への入り口をどんどん広げてくれます。そして紳士的かつ若々しい、とっても魅力的な人ですね。

最高の演奏ステージはどこですか？

オリンピック会場やワールドカップなど、スポーツの祭典での演奏です。

どんなに小さなステージでも、大きなステージでもステージが輝きを放つ瞬間があります。演者一人一人が輝き、光の粒がステージいっぱいに溢れ、お客様の顔が輝いて見える瞬間があります。そのステージをいつもお客様にお届け出来るよう日々演奏力、表現力を磨き、心から自分自身が最高の演奏をお届け出来るようにしていたいです♪

札幌市が冬季五輪・パラリンピックの招致に乗り出していますが、その開会式で演奏することです。父が学生時代に東京五輪の聖火ランナーだったので、実家に当時のトーチが飾ってあるんです。それが羨ましくて(笑)。世界中が注目するの晴れの舞台で仲間たちと思いっきり太鼓を叩き、北海道の音楽を発信するなんて考えたらワクワクしますね。

information

後援会からのお知らせ
最新の情報は茂呂剛伸Webサイト・Facebookをご覧ください

『盲目のサロルンカムイ』好評を受け再演!
4月17日「恋をうしなった乙女の宵」・18日「画家の青年の真夜中」

昨年9月に「札幌国際芸術祭2017」の連携事業として上演しご好評をいただきました『盲目のサロルンカムイ』。
そのキャスト・スタッフが再び札幌時計台ホールに結集し、公演する運びとなりました。
今回は初演で特に人気の高かった「恋をうしなった乙女の宵」と「画家の青年の真夜中」の二作品をピックアップしています。
今年で創建140年を迎える時計台で、再び繰り広げられる物語。初演をご覧いただいた方も、まだの方も、是非ご覧ください。
チケットはメール予約、又はローソンチケットでお求めいただけます。残席が少なくなっておりますので、お早めにお求めください。
(本誌発行時に完売の節は、何卒ご了承ください)
●2018年4月17日(火)「恋をうしなった乙女の宵」●4月18日(水)「画家の青年の真夜中」
●会場…札幌時計台ホール(札幌市中央区北1条西2丁目 時計台2階) 両日19:30開場・20:00開演
●チケット(各公演全席自由席)…一般 ¥3,500／CD付 ¥5,000／学生(大学・専門・高校) ¥2,500／学生(小学校・中学校) ¥1,500
●オリジナルCD ¥2,000
●メールチケットお取り置き・お問い合わせ…moro-t@mirai-t.com ●ローソンチケット Lコード…12238

編集後記

いつもご愛読くださいまして、ありがとうございます。今号もお届けをお待たせいたしましたが、昨年末から今年にかけてのさまざまな活動をご紹介させていただきました。北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群の世界遺産登録への節目となる今年、本誌では「縄文と観光」を年間のテーマとし、インタビューや誌面で観光の切り口から縄文文化のさらなる広がりの胎動をお伝えしていきたいと思っております。今後も茂呂剛伸と門下メンバーの活動、インタビューなどを通じてより充実した内容を目指してまいりますので、よろしくご愛読のほどお願いいたします。
■vol.09…2018年9月下旬発行予定　＊内容・発行日は変更となる場合がございます
＊バックナンバー(vol.01～06)ならびに英語版(vol.01～03抜粋)・フランス語版(vol.01・03合併号／vol.02)をご希望の方は、事務局までお問い合わせください

茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足し、この春4年目を迎えたのが「茂呂剛伸後援会」です。
本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。
【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com ＊茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください

Goshin Moro
Supporters Club
News Letter
茂呂剛伸後援会 会報 第7号
2018年4月16日発行

発行者　茂呂剛伸後援会事務局
発行所　茂呂剛伸後援会
064-0804
札幌市中央区南4条西1丁目15-2 栗林ビル7階
株式会社オフィスモロ 内
デザイン ウリュウ ユウキ(クリエイティブワークス19761012)

TEL 011-200-2112
FAX 011-200-2113
moro-t@mirai-t.com
www.goshinmoro.com